

発達に違いのある子どもたち 幼児期のことばの発達の基礎知識

話し言葉の役割

人のコミュニケーションには、視覚情報、聴覚情報、言語情報の3つの要素があると言われています。アメリカの心理学者であるアルバート・メラビア氏が1971年に発表した論文では、各要素が人に与える印象は、視覚情報(表情、視線、眼差し、目配せ、指差し、ジェスチャー、相づち、姿勢、態度など)が55%、聴覚情報(声のトーン、イントネーション、強弱、速さなど)が38%、言語情報(話しことばの内容)が7%であるという結果を提唱しました。

この研究は、視覚情報、聴覚情報、言語情報を矛盾した形で人に提示した場合、どの情報をもっと印象づけられるかを実験したもので、怒った顔を見ながら、優しい声で「好き」と言われた時の印象など、幾つものパターンを作つて集計した結果、人は話しことばの内容と矛盾する視覚的、聴覚的情報を与えられた時、ことばよりそちらを優先して捉える確率が高いことがわかりました。

この3つの要素を、言語的コミュニケーション(言語情報)、非言語的コミュニケーション(視覚情報、聴覚情報)

2つに分けて考えると、人と人との円滑なコミュニケーションには、言語情報のみではなく、非言語的コミュニケーション手段との調和が重要であるということが、実証されたと言えるのではないだろうか。

発達途上にある子どもの「コミュニケーション」

一方、子どもの話しことばが遅れていると感じた時、周囲の大人はつい、「ことばでちゃんと話す」ことを目標としがちです。しかし、発達途上にある子どもは、ある意味ことばが不明瞭だったり、足りなかったりは当たり前で、前編で述べたように、幼児期のことばの発達は個人差が非常に大きく、特に話しことばは氷山の一角に過ぎません。ことばがうまく出なくても、コミュニケーション意欲が高い子は身振り手振り、全身を使って表現しようとはしますが、それに対し大人が「ことばでちゃんと言う」ことを求めすぎると、ことば以外の非言語的表現を否定してしまうことになり、子どもの表現意欲はどんどん削がれていってしまいます。

「ゆとりある生活」と「聞き上手」な大人の存在

では、子どもとどう関わればいいのか、悩むお母さんやお父さんは沢山いると思いますが、親の役目はまず、子どもを「食べさせて、着せて、寝かせて、大きくすること」です。それができていればまずは良し、そのように、お母さん、お父さんが自身を肯定し、ゆつたりと構えられること、それが心の「ゆとり」につながり、決して子どもに多くの時間を費やすことばかりがゆとりではありません。そして、「聞き上手」な大人とは、少々ことばが遅くとも、子どもが発する言語的、非言語的コミュニケーションの意図を汲み取り、肯定し、膨らませ、やり取りの楽しさを体感させてくれるような大人のことを指し、そういった存在が、子どものことばの発達を促す大事な要素となります。

サリワード「語りかけ育児」のすすめ

その「聞き上手」な大人となり、なおかつ子どものことばを導くにはどう関わればいいのか、その具体的な方法を提案した書籍の紹介です。イギリスの言語聴覚士、サリワード氏が発表した「語りかけ育児」は、子どもの言語能力や知能を確実に伸ばす育児方法としてイギリス政府が推奨する育児書です。親がしっかりと自分向き合ってくれる、という安心感を与え

ることで、赤ちゃんの意欲と自己肯定感を育てることができ、親子の関係が良好になり、思春期の問題を未然に防ぐことができるという面も指摘されています。(0〜4歳わが子の発達に合わせた「語りかけ育児」より抜粋)

その本にある五原則の一つ、「子どもが主役」には、大人の都合で無理に子どもを集中させようとしたり、ことばを繰り返させたり、教え込もうとせず、あくまで大人は子どもの視線や意識を追い、子どもの興味に合わせることで、視線を共有したり、コミュニケーションの基盤である「共感」へと発展させる、そういった関わり方の具体的方法が書かれています。1日30分、難しければ20分、親子で楽しむ時間を確保することで、子どもの社会性の基盤となる「愛着」の形成にもつながります。2020年には訳本のコミック版も販売されており、さらに読み進めやすくなりました。子どもとの過ごし方の参考にさせていただければ幸いです。

あとがき

2014年9月から、広報うとの奇数月に寄稿させていただきました。今回をもって「発達に違いのある子どもたち」の連載を終了させていただきます。ありがとうございました。

参考文献

0〜4歳わが子の発達に合わせた「語りかけ育児」/サリワード著・中川信子監修 / 小学館
文書寄贈 NPO法人まごころ・コミュニケーションの発達支援